

## 24. ナニワズ

早春の林床で雪解けとともに黄色い花を咲かせるのは、ジンチョウゲ科ジンチョウゲ属のナニワズ (*Daphne pseudo-mezereum* subsp. *jezoensis*) です。

一風変わった生活史の持ち主で、花が終わると夏に一度落葉しますが、秋に再び新葉を伸ばし翌春のためのつぼみを付けて越冬します。高さ 50 cm ほどの株立ちになる落葉小低木で、本州中部から南樺太まで分布しています。枝は灰茶色で太くまばらに分かれ、長さ 3~8 cm、幅 1~3.5 cm の葉がその先に互生します。葉身は倒披針状<sup>とうひしんじょう</sup> 楕円形で先端は丸く、基部はくさび形をしています。4~5 月に咲く花は、2~10 個が集まった束生状となって枝端につき、よい香りがします。萼<sup>がく</sup>は筒状で長さ 4~9 mm、花びらのように見える部分は萼の先が 4 片に分かれたもので、長さは 4~7 mm あります。雄しべは萼筒の内側の壁に上下 2 段に 4 本ずつ、あわせて 8 本つき、底には楕円形の子房があります。上列の雄しべがよく発達して萼筒から少し出ている株が雄株で、雄株よりも小さい花をつける株が雌株です。果実は長さ 8 mm ほどの楕円形で夏に赤く熟します。

ナニワズは別名エゾオニシバリ (蝦夷鬼縛り)、エゾナツボウズ (蝦夷夏坊主) ともいわれ、オニシバリ (*D. pseudo-mezereum* subsp. *pseudo-mezereum*) の亜種にあたります。オニシバリの名は非常に強い樹皮の性質を、「鬼も縛ることができる」とたとえられたことに由来しています。また、ナツボウズは夏に葉が落ちることからつけられた名前です。どちらも「北海道の」という意味で「エゾ」がつけられています。

アイヌの人々はケトニまたはケト・ハシ (つっぱる・灌木の意) と呼び、毒矢を作るのに利用していました。蝦夷地を探索し、のちに「北海道」の名付け親となった松浦武四郎は「夏坊主という木は毒草で、アイヌ人はこの木を煎じて汁を銚に塗り、トド猟に使っているがどんな大きなトドでも一本で死ぬ。」と日誌に記しています。

本園内では樹木園などの林床や北方民族植物標本園で見ることができます。園内の開花記録によると開花日の平均値は 4 月 10 日で、最も遅い開花日は 4 月 24 日です。



雌花

雄花

果実

ナニワズ

(*Daphne pseudo-mezereum*

subsp. *jezoensis*)

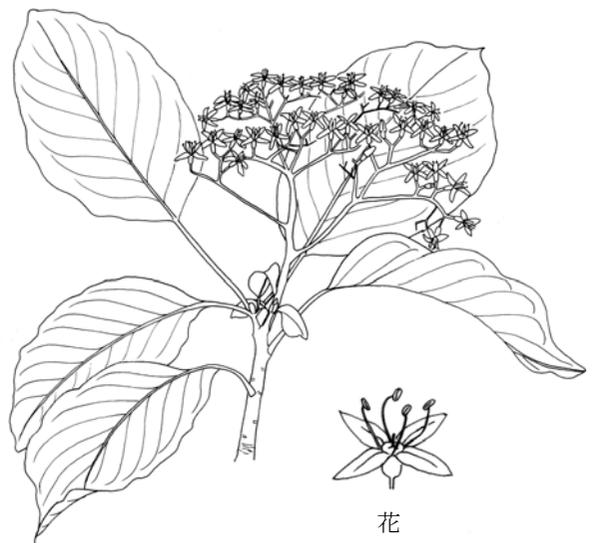
## 25. ミズキ

ミズキ (*Cornus controversa*) はミズキ科ミズキ属の落葉高木で、日本各地の山地にふつうに見られます。幹は直立し高さ10~15mにもなり、枝は車軸状に出て横に水平に広がるので、階段状の特異な樹形となります。樹皮は灰褐色で老樹になると縦に裂け目が入ります。若枝は紫紅色で、葉は互い違いにつき、枝先に集まって付きます。葉柄は長さ2~5cm、葉は広卵形~楕円形で長さ6~15cm、幅3~8cmで先が尖ります。葉の表面は光沢がありますが、裏面は粉白色で短い伏毛があります。5~6月に枝端に直径6~12cmの散房花序をつけ、白い小さい花を開きます。この花には花びら、雄しべがそれぞれ4個ずつあり、ともに長さ5~6mmです。水平に伸びた大枝の一面に花序を密につけるため遠くから眺めると樹全体が白く見えるほどです。秋に実る果実は直径6~7mmの球形で黒紫色に熟し、鳥や熊などが好んで食べます。

ミズキは北海道、本州、四国、九州に広く自生し、南千島、朝鮮半島、台湾、中国からヒマラヤの山地まで分布しています。根の吸水作用が強く、とくに芽を吹く春先に地中から多量の水を吸い上げるため、この頃に枝を切ると水が滴り落ちます。この性質からミズキ(水木)の名が付けられました。白く美しい材は加工しやすいので、器具材や各種細工物材として使われるほか、東北地方ではこけしをつくる材料として用いられます。また冬の間は若枝が紅色を帯びて美しいことから小正月の<sup>まゆだま</sup>繭玉木に使われるなど、民俗と関係の深い樹木といえるでしょう。

アイヌの人たちの儀礼に欠かすことのできない祭具であるイナウ(木幣)は、通常はヤナギで作られますが、神様にとくに敬意を表す場合はミズキを用いました。ミズキで作ったイナウは神の国では銀のイナウになるといわれています。ちなみに金はキハダで、ハンノキでは銅となるそうです。

このほか園内にあるミズキ科の植物には、北ローンなどで見られる白い4片の総包が花びらのようで美しいヤマボウシ(山法師 *Benthamidia japonica*) や、灌木園で見られる葉の中央に小さな花をつけるハナイカダ(花筏 *Helwingia japonica*) などがあります。



ミズキ (*Cornus controversa*)

## 26. ノリウツギ

日当たりのよい場所に大きな白い花穂をつけるのはユキノシタ科アジサイ属のノリウツギ (*Hydrangea paniculata*) です。北海道から本州、四国、九州、千島、樺太、中国に分布し、山地や海岸に多く見られる落葉小高木で、高さは約5mほどに達します。肥沃な土地や湿気のあるところを好んで生育するため、日当たりのよい森林の縁や山裾に出現するほか、伐採跡地に最初に現れる植物の一つです。

北海道にはとくに多く生育していて、低地で見られるものは樹形、花穂ともに大きく、山地にいくにつれて小さくなります。樹皮は灰白色で不規則に裂けてはがれ、小枝はまっすぐによく伸び、皮目という通気を行う部分が褐色の裂け目状に点在します。葉は対生でまれに3輪生し、長さ5~15cm、幅3~8cmの楕円形から卵状楕円形で、先端は鋭くとがり、基部は丸く、長さ1~4cmの葉柄があります。表面ははじめは毛がありますが後に無毛となり、裏面は葉脈と脈腋にそって伏毛が生え、縁には鋭い鋸歯があります。花はピラミッド形で枝先につき、長さ8~30cmにもなります。花のように見える部分は装飾花と呼ばれる中性花で、白色い花弁状の萼片を4枚持ち、中央の雄しべと雌しべは退化しています。一方、両性花は小型で萼片、花弁ともに5枚ずつ、雄しべ10本、花柱3本からなり、果実は卵形で長さ4~5mm、種子には両端に尾状の翼があります。

ノリウツギの茎や根には太い随が通っておりストローのようになっているので、それを利用して煙管(パイプ)やステッキなどが作られ北海道や日光の名産品にもなっています。和名はかつてこの木の皮から製紙用の糊をとったことから、糊を取るウツギ(中が空の木)に由来するほか、ノリノキ(糊の木)、ネリキ、トロロノキなどとも呼ばれています。北海道ではサビタと呼んで、これからとれる糊は「サビタ糊」「北海道糊」として高級紙を作るのに利用されていましたが、名前の由来ははっきりしていません。

ノリウツギは園内の高山植物園や灌木園、北方民族植物標本園で見ることができます。灌木園にはいろいろなアジサイ属(*Hydrangea*)の仲間が栽植されているので、比較してみるのもおもしろいでしょう。



ノリウツギ (*Hydrangea paniculata*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

## 27. ハリギリ (センノキ)

緑がうっそうと繁る広葉樹の森の中で、ごつごつした枝の先に天狗の団扇のような大きな葉をひろげ、黄緑色の花をつけるのはハリギリです。ハリギリ (*Kalopanax pictus*) はウコギ科ハリギリ属の落葉大高木で東アジアに1属1種のみが分布しており、北海道、本州、四国、九州、サハリン、南千島、朝鮮半島、中国大陸の山地に見られます。

幹は直立し高さ25m、直径1mにもなり、樹皮は黒褐色で不規則に裂けます。枝には太く鋭い刺があり、古い枝にはその跡がいぼ状に残ります。葉は長さ、幅ともに10~30cmと大きく掌状に5~9裂して縁には細かな鋸歯があり、葉柄は10~30cmと長く、枝先に集まってつきます。7~8月にかけて、黄緑色の小さな花が多数集まった直径20~30cmの総状の散形花序を枝先につけます。果実は液果状で10月頃に黒紫色に熟します。

和名は「針桐」で、大きな葉が桐の葉に似ていて枝に刺があることによりです。林業の分野ではセンノキと呼ばれ、漢字では「栓」と書きます。材は丈夫で柔らかく、加工しやすいのが特徴です。鉋をかけると桐(キリ *Paulownia tomentosa*) に似た光沢が出て、明るくきれいな木目が現れます。北海道が主産地で、ベニヤ板のほか建具、家具、器具材、楽器、彫刻などに用いられます。アイヌの人たちは「アユシニ (刺・多くある・木の意)」と呼んで、この木で木鉢、臼、杵、箕の類のほか大木からは丸木舟を作りました。

4月下旬から5月上旬にかけてふく新芽は、同じ科で春の山菜としてなじみが深いタラノキ (*Aralia elata*) によく似て食用になります。しかしタラノキに比べると灰汁が強く味も劣ることから、アクダラやイヌダラと呼ぶ地方もあります。

そのほか、園内にあるウコギ科の仲間には古くから食用とされている多年草のウド (*Aralia cordata*)、低木で枝に刺があるエゾウコギ (*Acanthopanax senticosus*) などがあります。この科の多様な姿を比較して観察するのもおもしろいでしょう。



ハリギリ

(*Kalopanax pictus*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg>

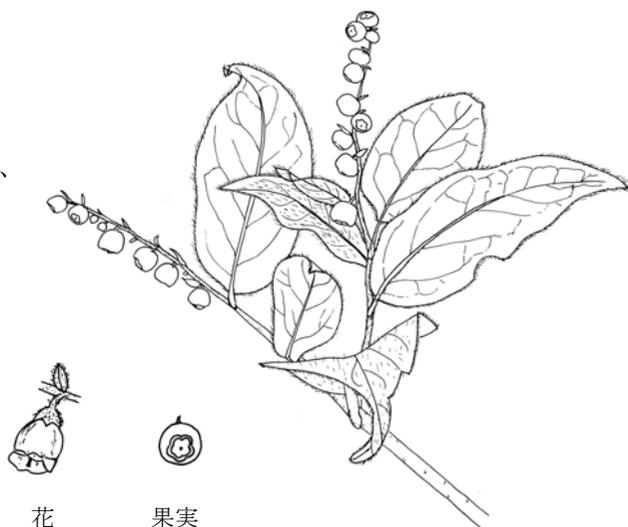
参考：日本の野生植物 (平凡社 1989) ほか

## 28. ナツハゼ

秋の紅葉とともに黒い果実を鈴なりにつけるのは、ツツジ科スノキ属のナツハゼ (*Vaccinium oldhami*) です。ナツハゼ (夏黄櫨) の名は初夏に色づく葉の様子が、秋に紅葉するウルシ科のハゼノキ (櫨の木 *Rhus succedanea*) のように美しいことからつけられました。また、黒い果実の上部に萼の跡が大きな輪の模様となって残る様子から地域ごとに様々な名が付けられています。たとえば、これを鉢巻きと見ればハチマキイチゴ (中国地方)、禿と見なせばハゲモモ (和歌山県)、茶釜を連想すればブンブクチャガマ (茨城、栃木、長野県)、などです。このように多くの地方名が付けられたのは、ささやかな秋の味覚として人々に親しまれてきたからでしょう。また、渋い赤色の紅葉が美しいので、庭木などとして植えられ鑑賞されます。

ナツハゼは高さ 1.5~3mの落葉低木で、北海道、本州、四国、九州、朝鮮南部、中国中部に分布しています。若枝には短い屈毛くつもうおよび物質を分泌する機能を持つ腺毛せんもうがありますが、のちに無毛となります。葉は互生して、長さ 4~10 cmの長楕円形または広卵形で先が尖り、基部は丸いくさび形で、1~2 mmの葉柄があります。葉の両面には荒い毛が散生し、縁には鋸歯に似た腺毛が生えています。5~6月、新しい枝の先に長さ 6 cmほどの総状花序そうじょうかじょをやや水平に伸ばし、赤みを帯びた黄緑色の花が多数下向きにつきます。花は長さ 4 mmほどの釣鐘形で先端が少し外側に反り返ります。短い花柄の付け根には包葉といわれる小型で皮針形の葉がつきますが、花序の先端に向かうにつれてこの葉は小さくなります。果実は球形で直径 7~8 mm、上部に萼の跡が輪のようにつくのが特徴で、熟すと黒褐色になります。

ナツハゼは灌木園、高山植物園で見ることができ、園内にはスノキ属の仲間としてアクシバ (*V. japonicum*)、オオバスノキ (*V. smallii*)、コケモモ (*V. vitis-idaea*)、などがあり、美しい紅葉とかわいらしい果実の両方を楽しむことができます。そしてジャムや菓子などでおなじみのブルーベリー (*V. corymbosum*、*V. angustifolium*) もナツハゼと同じ仲間です。



花

果実

ナツハゼ (*Vaccinium oldhami*)

## 29. オオモミジ

秋の紅葉を代表するカエデやモミジは、古くから日本人に親しまれ、庭木や盆栽などに利用されるほか、和歌に詠われたり<sup>うた</sup>絵画や和服の文様として描かれたりしてきました。「紅葉」はもともと落葉樹の葉が秋になって色づく現象を示す言葉でしたが、のちにカエデ科のイロハモミジ (*Acer palmatum*) を中心とする仲間の名前として使われるようになりました。

一方、「紅葉」<sup>こうよう</sup>とは葉が落ちる前に色づくことをいいますが、一般に最低気温が8°Cを下まわるとこの現象が始まります。緑色に見える葉には、緑色の色素クロロフィルのほか、黄色の色素カロチノイドが主に含まれています。黄色に色づく現象は気温が低下するにつれて葉の光合成をする働きが弱まり、クロロフィルが分解されて緑色が薄くなった結果、黄色のカロチノイドのみが残ってしまうので黄葉となります。これに対して赤く色づく現象は、緑色のクロロフィルが分解されていくのと同時に葉に残された糖分からアントシアンという赤色の色素ができるため、紅葉となります。

カエデ科カエデ属のうち日本には26種が自生するとともに、イロハモミジやオオモミジでは栽培品種が数多く知られています。その中の一つ、日本固有種で北海道にも分布しているオオモミジ (*A. amoenum* var. *amoenum*) は高さ15mにもなる落葉高木です。滑らかな樹皮は灰褐色で、葉は対生し、柄が長く葉身はやや円形で掌上に7~9裂し、よくそろった細かい鋸歯があります。花は5月頃に咲き、暗赤色の小さい花が下向きに15~30個集まって複散房花序<sup>ふくさんぼうかじょ</sup>となります。果実は<sup>よく</sup>翼がつき平開または鈍角に開きます。

本園内にはそのほか、エゾイタヤ (*A. mono* var. *glabrum*)、クロビイタヤ (*A. miyabei*)、ヤマモミジ (*A. amoenum* var. *matsumurae*)、コハウチワカエデ (*A. sieboldianum*) など外国産種を含め18種類が自生または植えられており、秋を美しく彩ります。

